

# とちぶん会報

No.65

2021年10月10日

栃木県文芸家協会 発行人 福田 三男  
事務局／栃木県下都賀郡壬生町中央町16-18 三上方  
〒321-0226 TEL090-9318-2492

## 夏季講演会の開催が中止になりました

8月21日(日)に開催することになっていた令和3年度夏季講演会は、文星芸術大学の堀江一郎先生を講師に迎えて実施する予定でした。しかし新型コロナウイルスの感染拡大により、栃木県にもまん延防止等重点措置が適用されたことから、やむなく中止となりました。マンガやアニメーションにまつわるお話を聴くことができなかつたことは誠に残念です。

昨年も秋季講演会が中止となり、2年連続して講演会が開催されませんでした。

新型コロナウイルスの感染の影響が今後どのようなことになるか分かりませんが、ワクチン接種も進んで来年は収束の方向に向かっていると信じたいものです。是非とも令和4年度は夏季講演会を開催したいと考えています。

## 第2回編集会議を開催・『朝明』第10号は編集へ

朝明第10号の原稿提出は9月末日に締め切り、総数85編(前号は97編)の作品が集まりました。各部門の提出数は以下のとおりです。( )内の数字は前号のもの。

- ・創作(小説) 9編(10) ・評論 3編(3) ・随筆 15編(17) ・詩 9編(9)
- ・短歌 14編(20) ・俳句 5編(3) ・川柳 8編(8)
- ・特集「ときめいた時」22編(27、テーマは「コロナで考えたこと」)

10月7日(木)に第2回編集会議が宇都宮市中央生涯学習センターで開催され、各部門の編集委員による原稿確認・編集作業が行われました。表紙デザインについては、天明鋳物師 栗崎二夫氏の「唐澤山神社 狛犬」の写真に決定しました。

次回の第3回編集会議は、「おかりや」にて11月11日(木)を予定しています。

## 会員数の減少傾向が止まりません

協会の会員数が減少しています。毎年入会者数を上回る退会者が出ており、現在の会員数は86名です。また今年度で退会予定の方が2名います。退会のおもな理由は高齢によるもので、会員の平均年齢も年々高くなりばかりです。今後高齢者の退会がますます見込まれます。

年会費の納入状況は78名の会員にとどまっています。会則により3年以上年会費の納入が滞った場合は、自動的に退会となります。

今後の協会の安定的な運営のためには、100名程度の会員数の維持が不可欠です。新会員獲得のために、会員による勧誘が大切になっています。

今後は寄付を受け付けることも考えていかなければならないでしょう。

## 川柳部門の三上博史さんが日川協の理事に選出されました

川柳部門会員の三上博史さんが、令和3年6月30日に開催されました一般社団法人全日本川柳協会の通常総会において理事に選出されました。

一般社団法人全日本川柳協会は、川柳の質の向上、社会的地位の確立等を図ることを目的として、昭和49年に結成(当初の名称は日本川柳協会)されました。川柳では唯一の全国団体として、全国川柳大会を開催し、各種大会・コンクールの共催、後援等の活動をしています。

三上博史さんの理事選出は栃木県内では初めてとなります。今後の更なる活躍を期待しています。

## 『創作への志』 会員通信 No.21 小説部門 福田 三男

「俺は、ものを書いて食っていきでえんだ」高校1年の時、彼と交わしたこの言葉が今も忘れられないのは「もの書き」という多少のあこがれを含んだ情緒的な言葉と「食っていく」という極めて現実的な言葉の対比が面白かっただけではない。「食っていく」という言葉に彼の並々ならぬ覚悟を見たからである。

「ところで、お前は どうする」「俺は、新聞記者になろうと思っている。新聞記者も、ものを書いて食っていく仕事には違いないから」3年生になった時「大学、どうする」と訊かれて「新聞学科を受けるよ」と答えた。「そうか、俺も受けようと思っているんだ」と言ったものの、彼が進んだのは、別の大学だった。やがて私は新聞記者に、彼は飯が食える作家になった。彼の名前は横松和夫、後の立松和平である。

### § 寄贈書籍の紹介 §

- 「栃木県現代誌年鑑 2021年版」栃木県現代詩人会編／発行所・栃木県現代詩人会／発行日・2020年6月27日[同会からの寄贈]
  - ・栃木県現代詩人会会員33名の参加を得て、会員の1年間の成果を集約したもの。当協会会員5名が作品を載せている。
- 「那須の緒 第14号」／発行所・貝塚津音魚／発行日・2021年9月10日[発行所からの寄贈]

### § 新会員紹介 § ・詩部門 森 秀夫[宇都宮市]

#### \* ∞ \* 事務局通信 \* ∞ \*

新型コロナウイルスの感染拡大によりいろいろな文芸イベントが中止になっていることも会員の減少傾向の要因になっています。コロナの所為で会員勧誘がなかなか出来ません。私は栃木県芸術祭川柳部門の審査員を務めていますが、9月の講習会が中止になりました。これが実施されれば、入賞者に対して勧誘をしようかと考えていました。しかし中止となりこの目論見が駄目になりました。12月の表彰式はどうなるのでしょうか。まだ淡い期待を抱いています。

今回の記事に、会員からの寄付を募るという案を提示しました。私は一般社団法人日本ペンクラブの会員になっています。同クラブは年会費の納入を案内する際に必ず寄付のお願いもしています。これに倣ってこの案は考えたものです。協会の安定的な運営のための方策は寄付以外にもあると思います。来年度の予算編成も厳しい状況にあることは確かですので、会員の皆さんのいろいろな知恵もいただきたいと考えています。

さて暗い話題ばかりですが、私は困難な時にこそ文芸という創造的な活動が役に立つと信じています。私が30年近く川柳と付き合っていて、決して止めようとしなかったのはそこにあります。自分と向き合っていてペンを握り、素直な思いを17音に吐いてみる。このカタルシスは最高のものです。これを支えに続けてこられました。川柳と出合っていなければ私の人生はどうなっていたか、少し想像しただけでぞっと寒気がします。川柳は生涯の友です。親友です。こういう私の例は他の短詩型、詩や散文の文芸にも通じることではないでしょうか。何故自分は文芸と関わっているのか。関わり続けざるを得ない自分の内面世界があると思います。(三上)